医科教養　講義10

芸術と医学

吹田　映子

（総合教育部門・文学）

芸術といっても形式は様々で、彫刻、建築、文学、音楽、舞踊、演劇、絵画、写真、映画、などがあります。

そのうち絵画という芸術形式は、とくに西洋キリスト教文化圏で発展し、その流れは20世紀にピークを迎えました。

本講義ではこの流れを逆向きにたどりながら、作品の背景にある医学の存在を透かし見たいと思います。

ちょっと長い前置き

© Museo Nacional Centro de Arte Reina Sofía

制作者：　パブロ・ピカソ（1881-1973）
題名：　ハンカチを持って泣く女の頭部。《ゲルニカ》後の制作
制作年：　1937年 (6月22日, パリ)
技法：　画布に油彩
寸法：　55 x 46 cm
所蔵：　ソフィア王妃芸術センター, マドリッド

© Museo Nacional Centro de Arte Reina Sofía

制作者：　パブロ・ピカソ
作品名：　ゲルニカ
制作年：　1937年（5月1日-6月4日, パリ）
技法：　画布に油彩
寸法：　349.3 x 776.6 cm
所蔵：　ソフィア王妃芸術センター，マドリッド

《ゲルニカ》は戦争と関わりがある、とよく紹介されます。何が描かれているか、確かめてみましょう。

また、「泣く女」に通じる人物像は見つかりますか？

ピカソが《ゲルニカ》を制作したのは、1937年4月末にスペインのゲルニカ村への爆撃が行われたことに対する抗議の意志からです。この爆撃は、スペインの内戦に介入したナチス・ドイツ軍とイタリア軍によるものでした。

《ゲルニカ》の初公開は、1937年のパリ万博においてです。制作に先立ってピカソはスペイン政府から、スペイン館を飾る壁画の制作を依頼されていました。この依頼にピカソは意欲的でなかったのですが、万博開幕のひと月前にゲルニカへの爆撃があり、怒りをモチベーションに、ひと月ほどで仕上げました。

《ゲルニカ》を制作した頃のピカソは55歳で、彼は20歳の頃からフランスで活動していましたが、籍のある母国スペインから依頼を受けるほど売れっ子になっていました。

ピカソの活動は多岐にわたり、画風もめまぐるしく変化しましたが、美術史上画期的な営為だったのは「キュビスム」という様式を友人と創始したことです。19世紀後半、すでに印象派と呼ばれる画家たちがそれまでの常識であった遠近法的な再現を放棄するという革新を行っていましたが、キュビスムはさらに進み、形態を把握するのに複数の視点を導入しました。これによって画面からは統一性が消え、人物や物はまるで工業製品のように分解され、また組み立てられたように見えました。

《泣く女》も《ゲルニカ》も、その流れの上にあります。

ところで、「アヴァンギャルド（前衛）」という言葉を聞いたことはありますか？

もともと軍事用語で先頭部隊のことを指しますが、とくに芸術の分野において、時代に先駆けて革新的な営為をおこなう人々のことを指すようになりました。美術史上で、ピカソほどこの言葉が似合う芸術家はいないとよく言われます。

そのようにアヴァンギャルドなピカソではありますが、初めからそうだったわけではありません。

15歳のピカソはこの大作をスペインの

全国展に出品し、受賞します。

制作者：　パブロ・ピカソ（1881-1973）
作品名：　科学と慈愛
制作年：　1897年
技法：　画布に油彩
寸法：　197 x 249,5 cm
所蔵：　ピカソ美術館,　バルセロナ

科学と慈愛

このタイトルは構図に対応しているように見えませんか？

左で、患者の脈を測っている医師が「科学 Science」を、右で、患者に飲み物（飲み薬）を差し出している修道女が「慈愛 Charity」を、それぞれ担っていると理解できるからです。

ところで、ここはどこでしょうか？

ここは、貧しい人々の救済を目的とした宗教的な施設です。修道女たちによって運営され、彼女たちは看護師の役割も兼ねていました。重い病人が出ると、そこに医師が出向いてきたのです。

19世紀のヨーロッパでは制度化された病院が増加しつつありましたが、都会でも田舎でも、医師のほとんどは自宅で開業し、病人の家に往診していました。こうした伝統から、今日でもヨーロッパでは根づよい在宅医療尊重の思想があると言われます。

ピカソがこの大作を仕上げたのは、美術教師だった父親の指導のもとででした。幼い頃から父の手ほどきを受け、さらに美術学校にも通っていたピカソは、この時点ではまだ保守的な（既成の価値観に対して従順な）姿勢を示しています。

ピカソ（とその父親）は、テーマと構図を決めるに当たり、同じスペインの画家であるエンリケ・パテルニーナの作品を参照したといわれます。

©Museo Nacional del Prado

制作者：　エンリケ・パテルニーナ（1866-1917）
作品名：　病院への母親の訪問
制作年：　1892年
技法：　画布に油彩
寸法：　150×208 cm
所蔵：　プラド美術館，マドリッド

こちらはより近代的な、医療に特化した「病院」ですね。

以上は19世紀末のスペインで描かれたものですが、似たような構図とテーマ、つまり「病床」は、同時代のイギリスでも見られます。

© Tate

制作者：　ルーク・ファイルズ卿（1843-1927）
作品名：　The Doctor
制作年：　1891年
技法：　画布に油彩
寸法：　166.4 × 241.9 cm
所蔵：　テート・ギャラリー，ロンドン

テート・ギャラリー：　イギリス政府が所有するコレクションを保管・展示する美術館。ヘンリー・テートという実業家のコレクションが元になっている。

これらの作品は「リアリズム」という傾向のなかに位置づけられます。画家たちは、それまでの常識に従って宗教上の物語や神話など、理想の世界を描くのではなく、現実（リアル）に目を向けようとしたのです。

リアリズムの先駆者として有名なのはギュスタヴ・クールベというフランスの画家です。

© Tate

《ザ・ドクター》は、テート・ギャラリーの生みの親であるテート卿（製糖技術で財を成した事業家）の依頼を受けた画家ファイルズが1891年に制作しました。

主題の選択はファイルズに任されていたようですが、彼が選んだのは、病床の子どもを見守る医師の姿でした。

これは、その20年ほど前にファイルズ自身が1歳の息子を失うという経験をしており、そのとき目にした医師（マレー）の献身的な姿が強く印象に残っていたためだと言われます。

また、同時代の批評家は、ファイルズのねらいが「我々の時代の医師の地位を記録すること」にあったと理解しています。

ファイルズの息子は幼くして亡くなってしまいましたが、《ザ・ドクター》に描かれているのは、危篤に陥っていた子どもが回復の兆候を示し始めたところです。

そう解釈できるのは何故だと思いますか？

子どもの血色もさることながら、主たる根拠は光の表現に求められます。

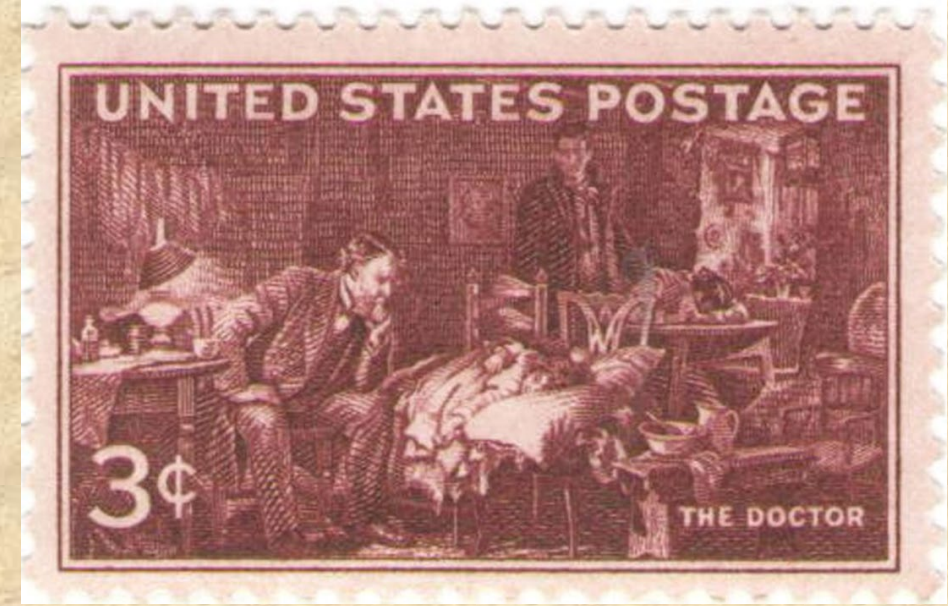
画面左のランプの光は、医師が夜通し看病に当たったことを示しています。この光は医師と子どもを照らしていますが、特に子どもの頬を見つめる医師のまっすぐな視線を浮かび上がらせています。

この視線とほぼ同じ角度で交差するように、画面右側には、子どもの枕元へ向かう光のすじが示されています。これは鎧戸の隙間から入り込んだ夜明けの光ですが、夜明けの光が古来「希望」の象徴であることに異論のある人はいないでしょう。

こうして画面中央の子どもは、医師のまなざしと夜明けの光とによって掬（すく）われる＝救われる位置にあると理解できるのです。

《ザ・ドクター》はとくに20世紀のアメリカで人気を博し、1947年頃には切手にもなりました。

こうした人気は、作品の模写がアメリカで制作され、これが1933年のシカゴ万博に出品されたという経緯に拠るところが大きいようです。



このように、画家たちが「リアリズム」の観点から「病床」をテーマに取り上げたのは19世紀末のことです。

それはちょうど細菌学の夜明けであり、近代医学が“勝利”の進行を開始したときでした。

とはいえ疫病は一気に征服されたのではなく、コレラ・痘瘡・ジフテリア・猩紅熱・腸チフス・赤痢・発疹チフスなどがまだ猛威をふるっていました。

ヨーロッパはまだ産業革命の後遺症から抜け切れておらず、とりわけ都市の貧困層の子どもはとくに時代の歪みを受けていました。なかでも乳幼児は伝染病と栄養障害にさらされていました。

ファイルズが生まれた翌年の1845年に、ドイツの思想家エンゲルスは、「マンチェスターでは労働者の子どもの57％以上が5歳未満で死亡している」と書いています。

19世紀のイギリスでは、一般の病院において子どもの入院は認められなかったといいます。それは、子どもが感染にきわめて弱いという理由からでした。

病気の治療はおもに家庭において、町から町へと行商している売薬商から買い求めた家庭薬で行われていました。家庭医療で治らないとき、ようやくその土地の医師を呼んだのです。しかしそのときにはすでに重篤化し、手遅れの場合が多かったようです。実はピカソの妹も、《科学と慈愛》制作の二年前にジフテリアにより８歳で亡くなっていました。

とくに感染症の流行後は、捨て子があとを絶たなかったといいます。皮肉にも、捨子院が小児医学の発祥の地となったのです。

いかがでしたか？

19世紀末の絵画を通して、当時の医療現場をとりまく社会状況が見えてきましたね。

芸術作品は、美的に価値があるとみなされるだけでなく、歴史学の資料でもあります。

今回の講義からは、医学史を学ぶ上で芸術（美術史の知識）は大いに役立つという結論が引き出せるのではないでしょうか。